よみがえれ 古海城《フルウミグスク》

～ 悠久の時の流れを感じさせる喜屋武岬先端の具志川城跡 ～

史跡 具志川城跡遠景（2006 年 11 月撮影、朱線は空洞部）

糸満市喜屋武に所在する史跡・具志川城跡は、平成 12 年度より国と県の補助を得て、保存修理事業を進めています。本概報では平成 16 年度から平成 18 年度までの発掘調査及び保存修理の概要について報告致します。

２００７年３月

糸満市教育委員会

具志川城跡は、沖縄本島最南端の字喜屋武具志川原に位置し、海に突出した標高約17m の海食崖上に築かれたグスクです。正門付近以外は三方が海に面した断崖となっています。自然景観も良く、発達した海食崖と雄大な太平洋を望み、城跡見学の他、年間をとおして釣りやサーフィンを楽しむ多くの人々がここを訪れます。平成 18 年 7 月 29 日、本史跡と隣接する喜屋武海岸及び荒崎海岸が国登録名勝地として登録されました。

具志川城跡は平成 12 年度から平成 18 年度までに石垣等遺構の発掘調査と石積み修復工事が実施されています。(図 1)

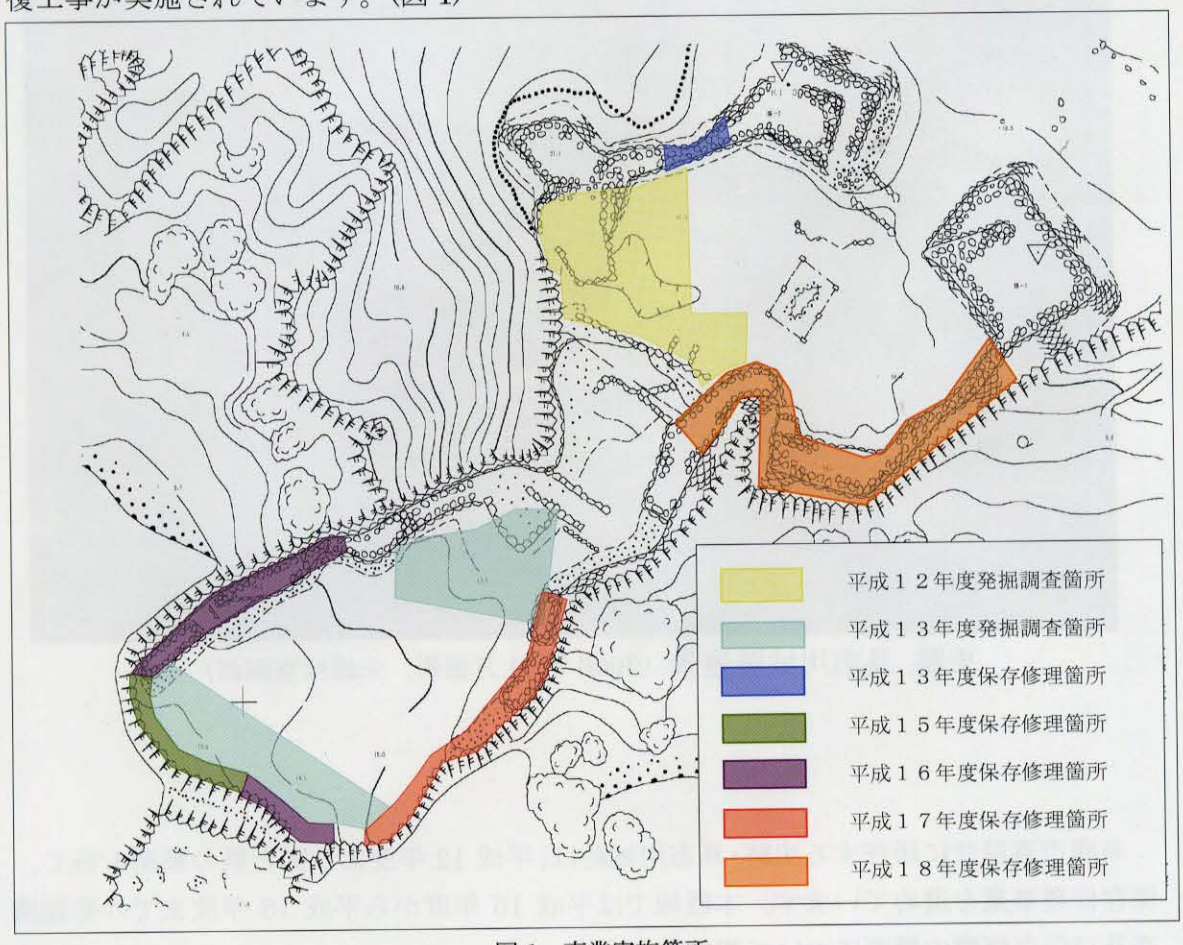


図 1　事業実施箇所

以下、年度別事業成果について概要を記述します。

平成 16 年度

16 年度は岬の郭東側石垣の保存状況確認調査を実施しました。東側石垣には地元喜屋武の久米門中が拝みの対象としている拝所が三基接しており、調査の際にその一部の石積みを外す必要性がありました。調査期間中、偶然にも門中による拝所拝みがあり、調査のために拝所の一部石材の撤去必要である旨を説明したところ「拝所に対し、お願い立てをすれば可能」との調査の趣旨を理解した回答を得ました。日を改め門中

代表による各拝所に発掘の報告が行われ(調査担当も御願に参加)、「申し入れが終わったので手を加えてもいいですよ」との報告を受けました。拝所についてもグスク時代以降の地元信仰対象構造物として扱い、とりあえず現状のままで維持することで香炉周辺は極力手を加えず、石積み内郭側のみの石の撤去に留めました。石垣上面と崖側外郭については、石垣に張り付いたガジュマルの根を撤去する作業が中心となりました。作業は、安全帯を腰に巻き高枝切鋏と鋸を使い慎重作業で少しづつ撤去し、残った根についてはキリで穴を穿いて除草剤に原液を注入しました。

基盤である石灰岩を台状に平坦に仕上げそれを基礎として石が積み上げられています。

Fig1 確認された岬の郭東側石垣

石積みは内郭部ではほとんどで面を確認することができましたが、外郭側では岬部近くで内郭面の一部を残しほとんどが崩れていることが分かりました。東側石垣は石灰岩岩盤に直接積み上げられています。内郭側を壇上に整え、崖側ラインに沿って表面の窪みを利用して外郭が成形されています。岬部近くでは急勾配で石が崩落し、先端部では立ち上がりと思われる岩盤内郭面のみが確認されました。岩盤の窪みに石積みの一部かと思われる石材が残っており、この面にも石垣が回らされていたと思われます。

修復工事については西側石垣現況図に設計を加え必要最小限天端を平坦に仕上げるに留める工事を行いました。岬近くでは西側石垣へ上る武者走様のスロープが取り付いていたようです。

天端のみを平坦に仕上げました。

Fig2 修復された岬の郭西側石垣

平成 17 年度

17 年度は城門東のアザナ東側石垣の保存状態確認調査を実施しました。この石垣はグスク内でも保存状態が良く、特にアザナへの取り付け部では天端幅が約 50 ｃｍと狭く表面が比較的安定した状態にあるため、本グスクで唯一完全な形で残っている箇所ではないかと思われます。本地区では石垣城面の崩落箇所よりも体積の多い崩落石材があって、糸数城跡等で見られるような内郭側で基礎をより強固にする二重積みの検出が期待されました。慎重に崩落石を撤去しながら面の確認を行いましたが、石列を確認することができず、西側の石積み確認調査時に再度挑戦することにし作業をいったん中止しました。なお、この地区については慎重を崩落石についても写真測量用の撮影機材により写真記録を残してあります。

Fig3 東のアザナ東側石垣発掘状況

Fig4 レーザーによる観測風景

天端のみを平坦に仕上げました。Fig1 と比較すると修復した高さが想定できます。

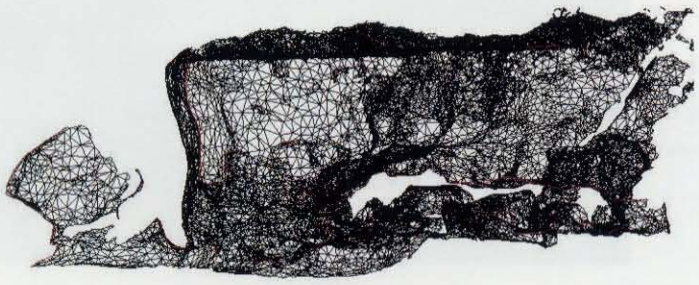
Fig5 修復された岬の郭東側石垣

修復工事については 16 年度に実施した岬の郭東側石垣について天端を揃えるのみの設計を加え工事を実施しました。岬先端近くの外郭崩落箇所については崖ギリギリ

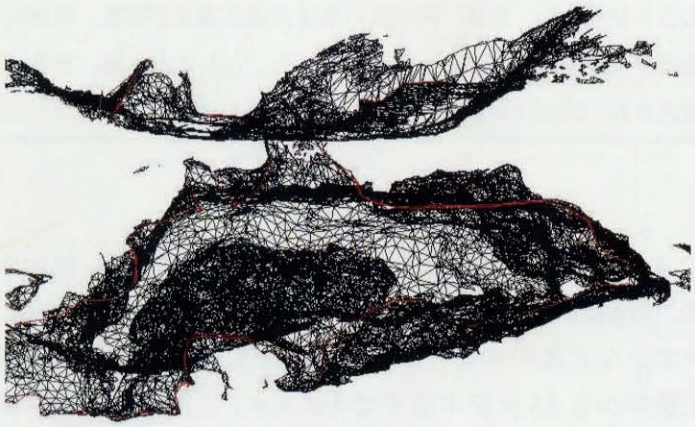
での石積み作業を試みたが、一部で石材を引っかけるくぼ地が無く石を安定させることが困難との石工の判断で若干内郭側へ食い込むかたちで修復しました。

平成 18 年度

18 年度は修復工事に先立ち昨年度実施した東のアザナ石垣の内郭基礎部の再調査を急遽実施した。西側石垣については前年度において、まず東側石垣と西側から延びる「U」字状の石垣を完成させた後、後付けで西が石垣を積みあげたことが各石垣の面の状況からある程度判断されていました。修復設計にあたり、西側石積みについて内郭ラインをどの位置で引くのか検討を要されたため、基礎の状況を確認する目的で崩落石を外していった。結果、崩落石全てを撤去した段階で内郭側の面らしき基礎石を確認し、その延長ラインを設計ラインとしました。今回の調査によって東側石垣取り付け箇所で、内郭側で前年度確認された石積み内郭ラインよりさらに内側で石積みラインと西側石垣に登るための階段状遺構が検出されました。今回確認された内郭ラインは東側崩落箇所にその延長を求めたところ数個の石の繋がりがあるようで、この地区については次年度以降再確認のための調査を実施します。



岬の郭レーザーデータ（海からの観測データ）。白く抜けた箇所から対岸がみえます。



「ヒーフチミー穴」のある空洞箇所のレーザー観測データ。空洞が穴で地表面に抜けているのがわかります。

修復工事については東側石積みと今回確認された西側石積みの修復工事を実施しました。東側については最小限に天端を揃え、西側については海側で天端を揃えたものの内陸側では若干の傾斜を保たせ、内郭上端については石材を揃わせず石積み作業途中の状態で作業を終了させました。

西側石垣の基礎を確認するため崩落石を撤去しています。

Fig6 西側石積み撤去作業

崩落石の撤去によって西側石垣に登るスロープが確認されました。

Fig7 修復された東側石垣

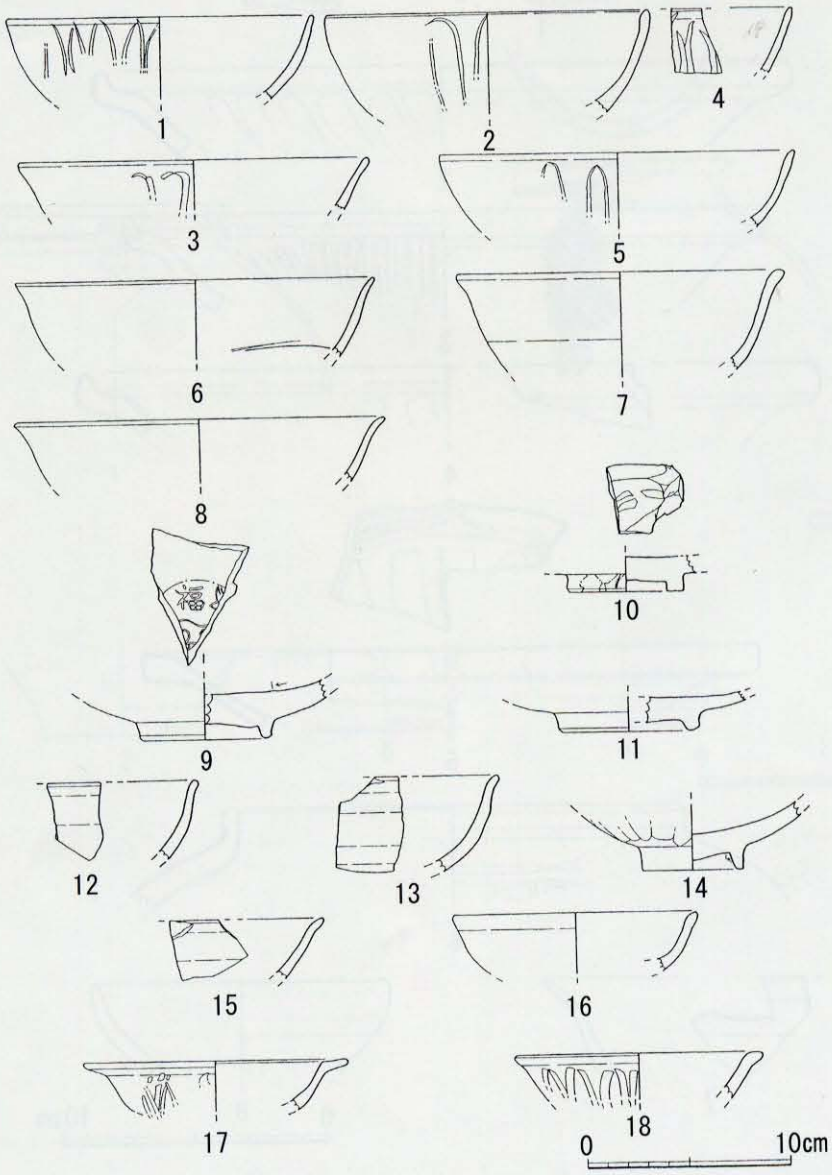
平成 18 年度保存修理箇所である東のアザナ東側石垣及び西側石垣の詳細設計の際、現状では西側石垣ラインを明確に引けないことが判明した。急遽、同地区の基礎部確認調査を実施。西側石垣は両サイドの石垣を積み上げた後、後付けで積みあげたことが判明した。さらに本石垣に登る二段のスロープが東側石垣内郭側で確認され、設計に加え今回その一部を修復している。

出土遺物

具志川城跡の発掘調査では、これまでに人口遺物として青磁、白磁、天目茶碗（てんもくちゃわん）、褐釉陶器（かつゆとうき）、カムイ焼、スズリの破片、石斧、青銅製金具類、古銭、自然遺物としてイモガイなどの貝類、牛や豚の骨、大型ハリセンボンなど魚の骨などが出土しています。青磁など中国陶磁器を見る限り本城跡は、12 世紀後半から 15 世紀中頃まで「グスク」としての機能を果たしていたことがわかっています。本概報では、岬の郭（くるわ）で平成 17 年度から 18 年度に出土した

遺物について特徴のあるものの中から紹介します。

第１図 1～5 は線彫りにより蓮の模様を描いた蓮弁文椀です。前概報では蓮弁に立体感のある「鎬蓮弁文碗」という古いタイプの青磁碗を紹介しましたが、今回の調査では検出されていません。古いものでは文様に立体感を持たせて表現しますが、時代が新しくなるにつれ葉の輪郭だけを削りだして表現するようになり、さらに新しくなると縦線のみで表現するようになります。6～8 は無文の碗です。口縁部が丸みを作って外に広がるタイプです。7 の表裏に釉に粗い「ひび割れ」が見られますが、「貫入」といわれるもので青磁の特徴の一つです。9～11 は碗底部の破片です。9 は外底面内底面とも「無釉」で内底に『福』の印文（スタンプ）が見られます。10 と 11 は外底のみ「無釉」に仕上げていますが、11 は高

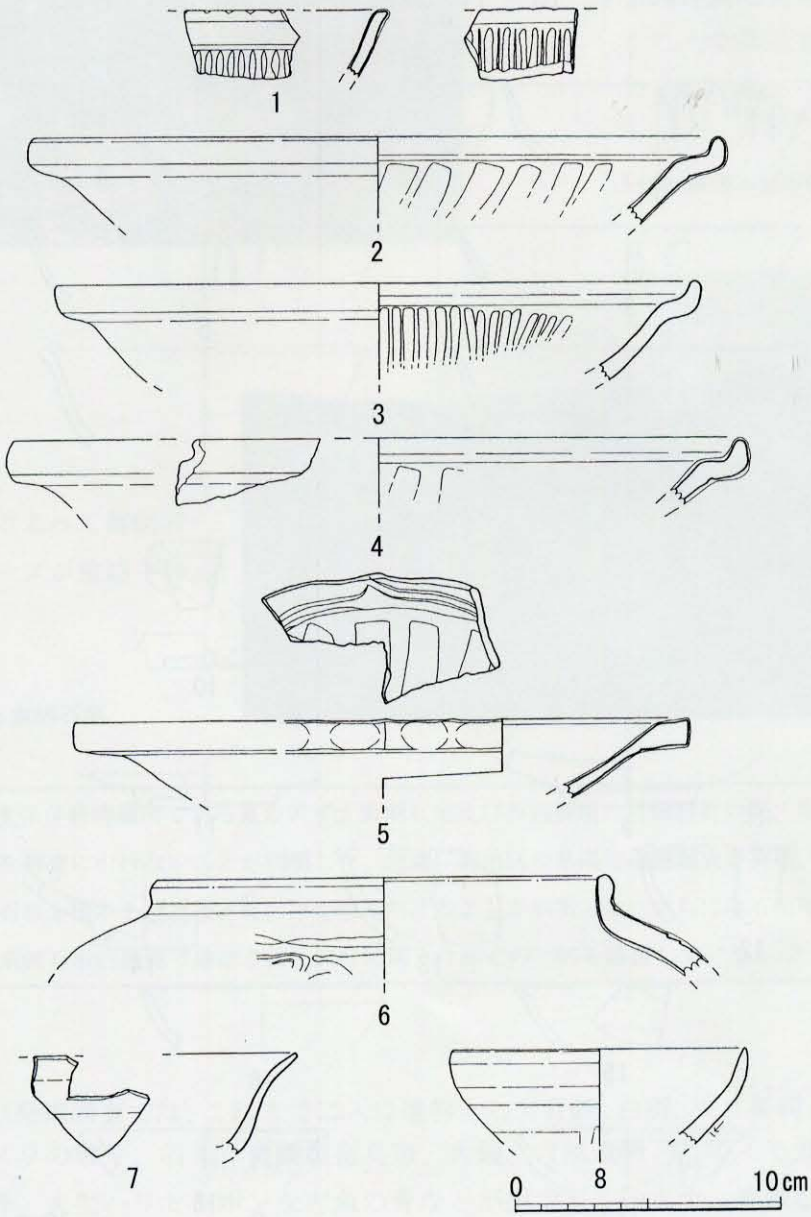


第１図　青磁：碗１～11　皿：15～18　白磁：碗 12～14

台畳み付け（接地する面）まで釉が塗られています。このタイプの磁器を焼く場合、釜の中で接着しないよう高台内に脚を置いて焼く必要があり、重ね焼きができません。

12～14は白磁碗です。12、13は口縁部資料です。口縁部は胴部を膨らませ口縁で僅かに外反するタイプで、共に透明感のある釉を施しています。14は底部資料で、高台は雑な作りとなっています。外底面は無釉。

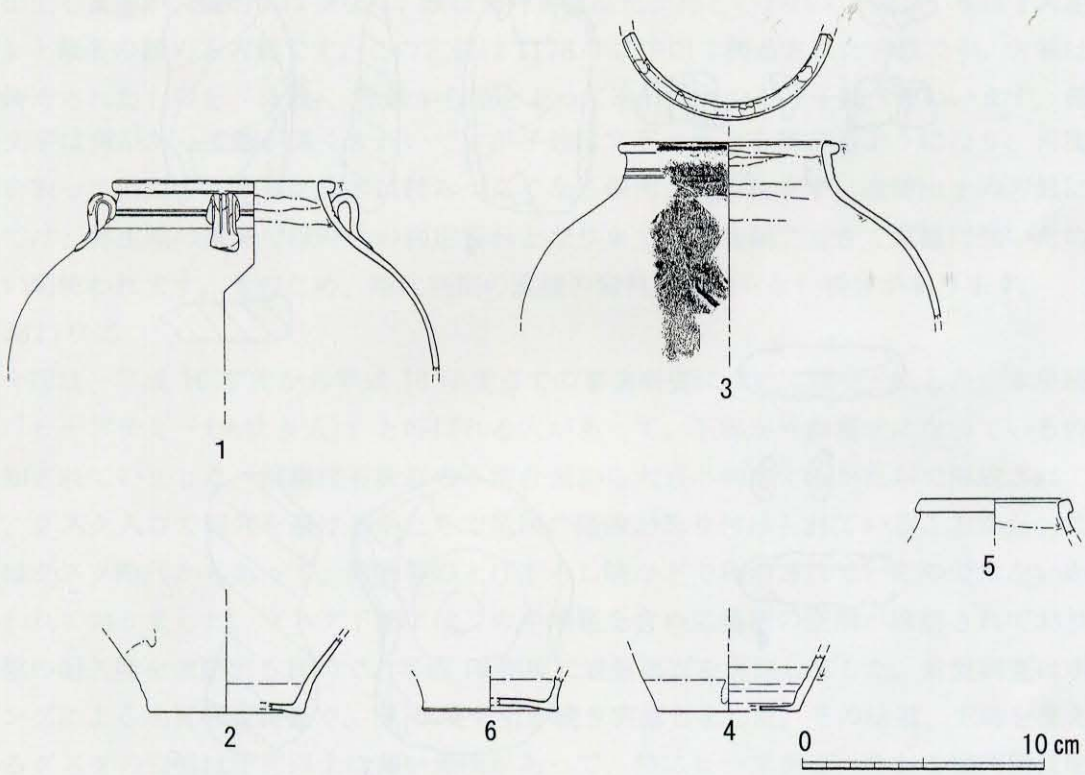
15～18は青磁皿です。17、18は口縁部が外側に折れる「口折れ皿」で、外面にヘラ彫の蓮弁文を描いています。15、16は無文の青磁皿です。15の口縁断面が「舌」状に薄く尖っ



第2図　青磁：盤1～5　壷：6　白磁：杯7　天目碗：8

て作られていることから16より古いかと思われます。

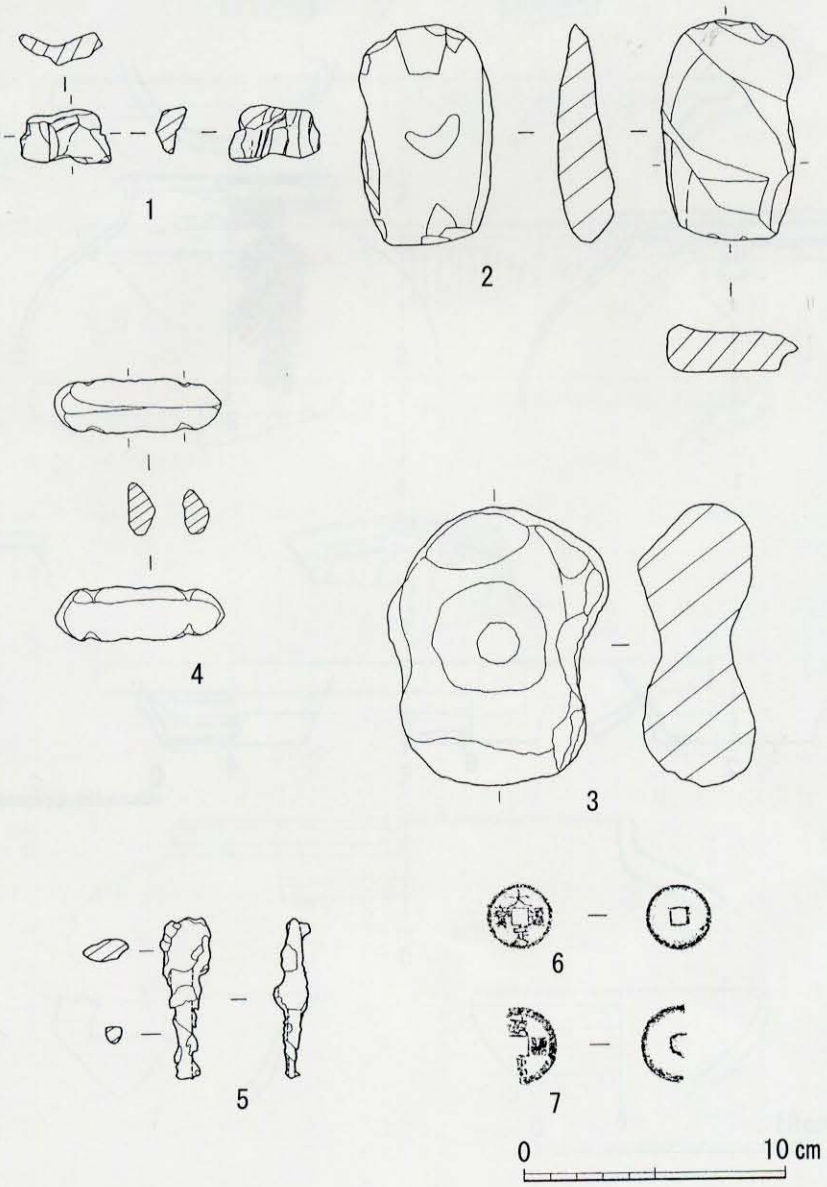
第2図には青磁の盤（ばん）、酒会壷（しゅかいこ）、白磁皿、天目茶碗を紹介しました。盤には口縁部が真直ぐなもの（1）と口近くで外側に折れて開くもの（2～4）、口の縁に刻みを入れて「鍔（つば）」を作るもの（5）があります。2、4、5には内側に幅広のヘラによる蓮弁文、3には線彫の蓮弁文が描かれています。6は比較的小型の酒会壷です。胴部が丸く膨らむ壷で、口縁は「無釉」となっています。酒会壷はフタとセットとなっており、フタを合わせる必要性から縁部分には釉は塗られません。7は小型の白磁杯です。素地（土）は白土で透明度の高い薄い



第3図　褐釉陶器・壷

釉薬をかけて焼かれています。8は釉薬に黒釉をかけた「天目茶碗」の破片です。主に「茶器」として使われたようです。

第3図に紹介したものは褐釉陶器といわれるものです。図に示したものは胴部から頸部にかけて緩やかにすぼまるもの（1）と明らかに直に立つもの（3）があります。1には残存する部分に縦耳が貼り付けられており、復元すると首部分に左右対称の四つの耳を持つ「四耳壷」だと思われます。3には胴部近くに形取による文様が浮き出ています。今回紹介できなかった陶器の中に色調、胎土（土）が 3 と共通するもので、龍文の描かれたものが検出されています。残念ながら接合は出来ませんでしたが、2は龍文を描いた壷が想定されます。2、4、6は褐釉陶器の底部資料です。胎土、色調などの諸特徴から2は1の底部、4は3の



第4図　石製品：1，4　石器：2，3　鉄鏃：5　古銭：6，7

底部だと思われます。推算した壷の高さは1が約45ｃｍ、3が約48ｃｍを測ります。

第4図には石製品、鉄鏃、古銭を図示しました。1は滑石の破片です。滑石は軟らかく加工のしやすい石材で石鍋などによく使われる石材です。残念ながら本資料は小破片のため器種の特定はできません。2は両刃の石斧です。刃は両方よりの研ぎで作りだしていますが裏面の研ぎが強く片刃的な要素の強い石斧です。刃部と頭部にはたたきによる割れと刃こぼれが見られ、かなり強くたたいたのか裏側では面の欠落が見られます。3は棒状の砂岩に

両サイドに紐縛りのための溝を刻んだ製品です。用途は不明ですが両サイドを紐で結び水平方向で使用することを想定すると網の錘ではないかと思われます。4はニービ（豊見城あたりで産出する砂岩）製のタタキ石とクボミ石兼用の石器です。木の実など硬いものを割るための石器です。5は鉄鏃（鉄製ヤジリ）です。南山城跡などグスク時代遺跡からよく出土しますが、量的には少なく、鉄は当時貴重品だったといわれています。6は『大定通寶』と銭名の読める古銭です。この古銭は1178年に中国で鋳造された古銭です。古銭は最初鋳造されたものを「母銭」、母銭から型をとって造ったものを「子銭」といいます。母銭の文字は角があって彫が深くきれいですが子銭は文字に丸みを帯びるようになり、何度か型を取って使用するうちに文字は読みづらくなる傾向が見られます。遺跡出土の古銭については、弥生期の遺跡では時代の判定資料となりますが、青銅でできて腐植に強いため、永い間使われます。そのため、時代判定の直接の資料にはならない場合があります。

おわりに

今回は、平成16年度から平成18年度までの事業概要について紹介しました。本史跡には「ヒーフチミー(火吹き穴)」と呼ばれる穴があって、下部が半洞窟状になっているのは周知されていました。洞窟は石灰岩の不整合面から大岩が剥落するかたちで形成されており、グスク入口で同穴を避けるかたちで数段の階段が取り付けられていることから、この穴はグスク時代からあって、荷物等の上げ下ろし時などで利用されていたのではないかといわれておりました。グスク下部にはこの半洞窟を含め二箇所の空洞が確認されており、岩盤の耐久度を確認する目的で、平成16年度に岩盤調査を実施しました。岩盤調査はボーリングによる地質構成調査で、17年度も引き続き実施しました。その結果、史跡を支えているグスクの岩盤は予想以上に薄い箇所があって、特にヒーフチミーのある城門側は地震等の影響で崩落する危険性が比較的高いことが判明しました。18年度に地質解析と岩盤を支える地下のボーリング調査を実施し、崩落防止の必要性について整備委員会に提案し意見を求めました。崩落防止については地元喜屋武へも説明し、基盤岩の現況と一部を埋めて耐久度を高める工事の必要性について理解を求めました。19年度は崩落防止についての詳細設計を実施する予定です。今後の石垣等遺構の保存修理については、崩落防止工事終了までいったん中断させ工事終了後再開する予定です。

なお、本書は史跡・具志川城跡の保存修理事業を広く市民県民に対しご理解いただくために作成いたしましたが、本書が地域の歴史学習や学校の総合学習等でもご活用いただければ幸いです。

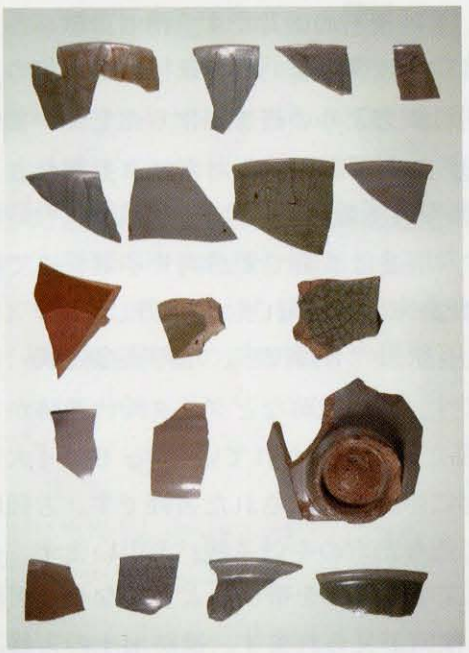


Fig8

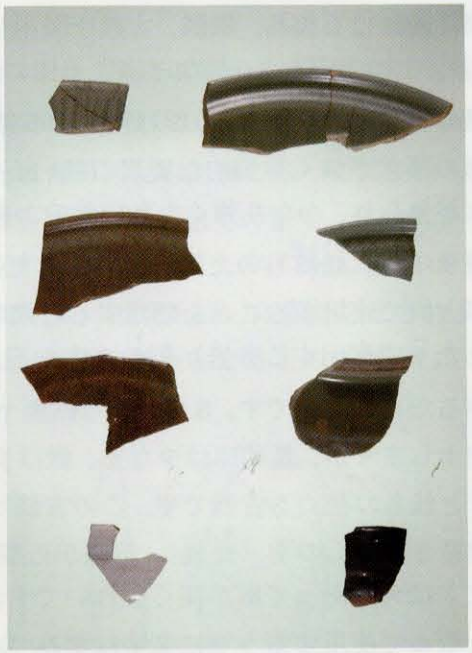


Fig9

Fig10

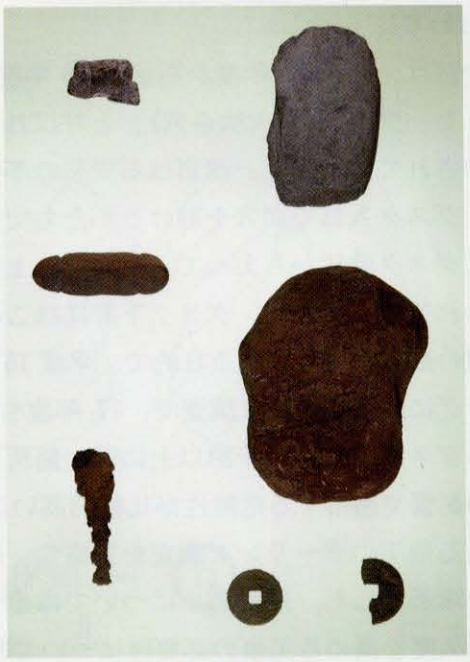


Fig11

発行／糸満市教育委員会　〒901-0392 沖縄県糸満市潮崎町 1-1
編集／糸満市教育委員会総務部文化課　TEL 098-840-8162
印刷／ｙｏｕきかく（糸満市字真栄里 371-3　TEL098-992-3503）